映画「春をかさねて」上映会

もう一度あたたかい春を

今年3月21日、旧観慶丸商店（石巻市中央）で、自主制作映画「春をかさねて」の上映会が行われた。映画の制作を手がけたのは石巻市出身の佐藤そのみさん。東日本大震災での自らの経験をもとに映画を制作した。その思いを取材した。

ゆうみ（右）とれい（左）の2人の少女を通して大川地区を描く

佐藤さんは小さい頃からものを作ることが好きで、小学6年生の時には、すでに映画を撮ることを志していた。中学2年生だった2011年、東日本大震災がおきて、佐藤さんの環境も大きく変わってしまった。みなさんは児童74人と教職員10人がなくなった大川小学校をご存知だろうか。そのうちの一人は佐藤さんの妹さん（当時12歳）だった。

佐藤さんが大好きだった大川地区の景色はすべてなくなってしまった。しかし、記憶に残る美しい自然、そこに暮らすあたたかい人たちを自分の手で撮りたい、映像にしたい、という佐藤さんの想いは変わらなかった。高校では演劇部に所属して脚本を担当し、卒業後は日本大学芸術学部に進み、映像の勉強に励んだ。今回の作品は、大学在学中に制作されたものだ。

「春をかさねて」は、大川中学校3年生の「ゆうみ」と、その親友「れい」、そして、2人をつつむ大川地区の自然と人々の物語である。震災によって奪われたもの、震災がもたらしたもの、静かな日常を一変させた「あの日」が、少女たちの等身大の目線で描かれている。丁寧に映し出された大川地区の風景、人びとの繊細な気持ちの変化、紡ぎだされた言葉のひとつひとつが深く美しい作品に仕上がっている。

旧大川小学校校庭での撮影風景

谷地地区土手での撮影風景

背中でゆうみの繊細な感情を表現した

佐藤そのみ

宮城県石巻市生まれ。大川小学校、大川中学校、石巻高校、日本大学芸術学部卒業。大学在学中の2018~2019年に、劇映画「春をかさねて」を自主制作 東京在住

佐藤さんが、上映会を石巻で開催しようと決めたのは、地元の人に見てほしいという強い想いがあったからだった。

「あの日から心を閉ざしてしまった人、言葉を発せなくなってしまった人が大川地区にたくさんいると思います。みなさんが一歩を踏み出せるきっかけを作りたいと思いました」と佐藤さんは言う。

タイトルの「春をかさねて」には、その思いを込めた。震災があって、3月はずっと暗い春だった。そんな春を、何度も何度も乗り越えて、「本当のあたたかい春を迎えよう」と人々の心が癒されていく。映画に登場する二人の少女をとおして佐藤さんが描きたかったのは、そんな折り重なった春のこと、幾つもの過ぎていった季節のなかで人々の心が移り変わっていく様子でもあったそうだ。

佐藤さんにとって、最も印象に残っているのは、大勢のボランティアや住民が集まっているシーン。地元の人もエキストラとして参加したこのシーン。大川地区の風景を映すカメラのフレームのなかに地元の人たちが本当にいてくれたこと、それが自分の大好きな地元の思い出を再現してくれたようだった。みんなでワイワイする場面は、映像のどこを見ても新たな発見があるように工夫をこらした、と佐藤さんは話していた。

映画の告知に使われた大川地区のイラストは佐藤さんのお母さんが描いた。大川地区に実在する場所でもあり、劇中にも2回登場している

「当初は映画を作らなきゃという義務感がありましたが、撮影を進めていくうちに、ちゃんと作りたい、撮りたいと思いがつのりました。そして、それを形にすることができたと思います」。

佐藤さんがこの映画に込めた想いがあたたかい春を連れて、多くの人に届くことを願う。

取材・文　齋藤 小枝（好文館高校3年生）

ゆうみとわたし

「春をかさねて」の主人公のゆうみは私が演じました。

私は小学校5年生から演劇を始めました。北海道から石巻に引っ越してきた時、同い年の友達が作れる機会になるだろうから、と母が勧めてくれたのです。以来、母と二人三脚で「スイミーはまだ旅の途中」という劇団に所属し、演劇活動を続けています。なにも考えずに役と対話ができることが演劇の魅力だと思っています。

2018年に開催された劇団の公演後、見に来ていた佐藤そのみさんが、直接声をかけてくださいました。映像作品の経験はなかったので、挑戦してみたいと思いました。

舞台では、時間の流れが一方通行で止まることはありませんが、映像を作る際には、撮る順番も時間もバラバラで連続していません。その場ですぐにそのシーンの感情を作らなければならなかったことが舞台とは大きく違い、非常に難しかったです。

撮影当時私は中学3年生。私が演じた「ゆうみ」は中学3年生の設定で、同い年です。ゆうみは、かつて経験したことがないいろいろなことが一気に襲ってきて、私だったらとてもたえられないような状況を、一人でかかえ、ずっと踏ん張っていて、同世代とは思えませんでした。まるで、中学3年生らしくしていてはいけない、と思っているかのように感じました。そのような感情を繊細に表現できるよう演技に集中しました。

主人公は同世代。でも同世代には思えないその感情をどのように表現するかが課題だった

齋藤 小枝

石巻日日こども新聞

発行
公益社団法人 こどもみらい研究所
〒986-0874 宮城県石巻市双葉町8-17
info@kodomokisha.net

コラボレーション・パートナー
地域を元気にする情報の架け橋 石巻日日新聞
〒986-0874 宮城県石巻市双葉町8-17
☎0225-95-5231
FAX 0225-94-5960

コラボレーション・パートナー
特定非営利活動法人 NPO日本財団ボランティアセンター
子どもの子応援プロジェクト

助成
JCB
「5」のつく日、JCBで復興支援

助成
3.11メモリアルネットワーク基金
JT NPO応援プロジェクト助成